

空



2015・2・3

SORA 59号

五十句

柴田 佐知子

山に鬼淵に籠棲む鳩を吹く

俯きて仰向きて田へ案山子来る

晴れ渡る山に囲まれ種を採る

桔梗の一分の狂ひなくひらく

蟪蛄の表へ出ると貌上ぐる

鹿の肉切り分く鹿の血の上で

小鳥来てしきりに頭傾げゐる

秋まつり極彩色の皿運ぶ

身を入るる隙なき露の大地かな

鬼いつも着たきり雀草の絮

葛の香や伝説残し村消ゆる

何やかや柱に掛けしころの月

立志伝読み了へてより長き夜

身ひとつの鳥や魚や冬に入る

冬帝の裳裾は灘や網を曳く

脚ひらく幕僚会議十二月

棺に寝るとき養生冬の雷

波音のほかは聞こえず白障子

灯を消せば一と間は寒の怒濤かな
極月や北に叡智の星集ひ

カーテンに猫の隠るるクリスマス
聖夜劇群れをはづるる子羊も

行くほどに明るくなりし枯野かな

湖に空が落ち込む寒日和

いつ見ても泣き貌ばかり巴鴨

狩の犬たちまち草に沈みたる

困りたる貌に狸の飼はれをり

闇汁を異形奇形が取り巻けり

学ぶこともうなき貌の寵猫

返事してまだ振り向かず葱刻む

異界より弾き出されし鳩

その先はやめとけと言ふ頬かむり

ふるさとは平家谷なり雪女

雪をんな人恐ろしと言ひにけり

雪女己が白さに飽いてをり

炉話の死者は戸板で運ばるる

山眠る民話の狐よくしやべり

一枚の日向にはづむ厚着の子

倒木のくつろいでゐる冬の靄

甚平着て出自問はるることもなし

六道の辻見えてゐる日向ぼこ
ストーブの前に洗ひし猫を置く
平凡な日がまた暮れて蜜柑むく
注連張ればすべて尊し冬ぬくし
繭玉をちよつと揺らして無為徒食
子を叱る声が路地よ日脚伸ぶ
冬萌の野は聞耳をたててをり
貫きし思ひの色や龍の玉
棒振つて山の子帰る雪解かな
伸ぶるだけ首を伸ばして鳥帰る

山河 高倉和子

太鼓打つ構へ大きく十二月

これ以上錆びぬ礎となりて冬

目障りなものより見ゆる寒さかな

冬菊の匂ひの中に墓を掃く

美しき冬の日向よふるさとよ

千本の日矢射す雪の山河かな

水際に消ゆる白波冬ぬくし

冬座敷母の遺影の加はりぬ

鳩くる街 中田みなみ

神宮の鳩くる街に暦買ふ

襟巻に首のせ恋の占ひ師

輪飾りや間口狭くて親しまれ

枯葉舞ふ並木歩けるところまで

ケーキ持つ父に幸あれ聖夜星

年の市髭を打ち合ふ槽の海老

綿虫やこのごろ着たき赤いもの

胸の灯 荒井千佐代

冬 至 服部早苗

殉教の灘しづかなり寒の日矢

膝毛布ダスティン・ホフマン目の深く

海苔濱に舟の一艘ひとり

家苞にひら茸ばかり一袋

北風や雑魚投げ捨つる帰漁船

落葉搔く目的あるといへばある

温泉玉子バッグに温し片時雨

炉辺語り行つてはならぬ女坂

柚子買うて先師を恋へり鉄砲町

夜景きららに多感なる冬の川

冬銀河街は淋しき人ばかり

ほそほそと火を養へる冬至かな

わが胸の灯より点してクリスマス

忘年や熱きチーズに舌を焼く

死出の衣をくれなると決め寒桜

葉牡丹の勢ひも恃む生きるとは

かつて能村登四郎先生が詠じし

(鉄砲町秋水の縦一文字)の句を思ひて

青 空 柴田志津子

去年今年 だいじみどり

敗蓮に城址の風のあるばかり

いそいそとそのいそいそも年忘れ

攻防なきままの城壁笛子鳴く

綿入れの綿ふくらます帰る子へ

城址は猫と鴉と落葉のみ

仰ぎけりメタセコイアの落葉手に

つつましき藩祖の墓や貴船菊

白菜を干す雨降るな風吹くな

青空に貼りついてゐる冬もみぢ

去年今年この世疲るることばかり

寒晴や対岸に照る油槽群

垣に干す繋ぎへ枇杷の落花かな

叱られて目を逸らす犬返り花

冬あやめ咲いて約束おもひだす

戦なく年の移れり大八洲

畑より戻り春着を吊しけり

藪柑子 野上杏 余寒 深川淑枝

火碎流の跡まざまざと冬ざるる

雲仙普賢岳 二句

車よりまづ杖降りて二月の野

噴煙の白きしづけさ冬紅葉

祖の積みし棚田の石や一の午

音粗き迷子放送年詰まる

観音の背に罅育つ余寒かな

燃えしふる大注連縄を裏返す

木仏に朽ちまはりたる田打かな

高々と湯町の河原どんど組む

山門の仁王の視野に恋の猫

真闇より父の天馬か虎落笛

鳥獸を煮て食つて山かすみたり

着ぶくれて生きる「ハヤブサ」還るまで

村抜けて川の老いたり花菜漬

藪柑子ほどの幸せ八十路にも

土壁に竹の骨出て雪の果

糸田 宮井 知英

川面より闇の濃くなる野水仙
鼯掛けて寂しき夜となりぬ
寒禽となり雄鶏の荒々し
崩し書く恋の一文木葉の葉髪
冬紅葉恋の一つも黄泉苞苴に

福岡 矢野 百合子

電飾を纏ひて惑ふ冬木かな
浮寝鳥群れてほどよき距離保つ
もてなしの落葉を少し掃き残す
柚子湯して子と戯るる思ひかな
寒卵割ればひとりの音がする

糸島 小林 朱夏

さざんかや外で遊べと母が言ふ
足もとの危ふくなりぬ着脹れて
奈落へと雪搔き落す寺男
水鳥の喧嘩売るごと飛び立てり
人込みを避け春泥に填りたる

粕屋 秋 千晴

毛皮敷く部屋に通され戸惑へり
遺されし襟巻に脚ついてをり
一月や干割れたる田に鳥遊ぶ
雪達磨作りて母を呼んでをり
足跡もつけずに消えし雪女郎

福岡 田代貞枝

お降りや本堂すべて黄金色
淑気なき主亡き朝を迎へけり
喪の家の正月ひそと過ぎにけり
古暦看取りし日々と逝きし日と
猪の住みつく山を相続す

千葉 原友子

不知火を待てばうしろに誰か立つ
抱き寄するごと腕とほし古外套
冬の鵝消化不良のこゑ出せり
まどろみの色となりゆき葦枯るる
もう会へぬ人冬麗へ送り出す

粕屋吉田 葦

男ひとり恋に死なせてどんどの火
風邪の床山おんおんと揺れ動く
柏手を打てば応ふる氷柱かな
アルプスを突き上げてゐる冬木の芽
煮凝やこまごまとある母の文

東京 山田正子

裸電球千枚漬を照らしけり
冬桜一葉の恋実らずに
冬銀河ギター弾く子は淋しがり
初めてのコーラ飲んだ日クリスマス
年変はる厨の鍋のふきこぼれ

福岡 山内 碧

御正忌の五色の旗の門くぐる
大ぶりの煮しめの並ぶお講膳
肩すかし喰つて時雨るる夜となりぬ
冬耕の人消すシーツ干しにけり
無敵なり父手作力の雑煮箸

山梨 鳳 蛭 華

ぐうの音のぐうの音を出し冬の虫
寒蘚の斑をぶちまけて招魂碑
ひひらぎの花の犇めき香の犇めき
繩解いて繩跳びにせし炭俵
水平線のみが濃かりし冬の窓

粕屋 戸 栗 末 廣

檜山の影のかぶさる冬用意
海峡へ日矢くつきりと七五三
冬の虹空へ階段あるごとし
うしろより猫が見てゐる目貼かな
山茶花の百の蕾の日数かな

長崎 栗 原 京 子

会ふまでの扉は六つ冬館
橋架けて渡船場消えぬ霧襖
家はもう見えぬ深さに紅葉狩
山裾に溶岩めきて柿紅葉
会釈して雲水を抜く師走かな

・ 第四回 「空賞」 受賞作品 ・

煙の中 戸栗 末廣



へレース編む夜とぶ鳥
を思ひつつ 柴田佐知
子 人生の哀歓を抒情的
に詠い上げたこの作品
に出合った時、心を揺さ
ぶられました。それか

ら数年して、柴田主宰の選を仰ぎたいと思い、
『空』に入会させて頂きました。

この度の受賞は私にとって何よりも大きな
励みになります。ありがとうございます。

鳶は日に鷗は水に初大師

春寒といふ薄紙をまとひたる

漕ぎ出でて霞の芯にゐるらしく

鴨帰る日かいくたびも水を搏ち

つなぐ手の無くて一列鳥帰る

座布団に猫の坐れる種物屋

百千鳥箒大きく使ひけり

葉ざくらや束ねて厚き父の文

トニツクのたちまち乾くみどりの夜

寺町や仰ぎ見るものみな涼し

夜は星の軒に立て掛け捕虫網

祭笛いつもとほくに聞こえけり

はらからの電話短かし夜の蟬

峰雲やさみしきものに天守閣

映るものみな信じゐる小鹿の目

木の洞を抜け秋風となりにけり

地球儀は今日も晴天稲の花

鉢植に研ぎ水をやり終戦日

法師蟬ひとつ離れてひとしきり

みづうみへ亀の歩める良夜かな

大き鳥運動会の上を過ぐ

銀杏を洗ふ庭先水びたし

干竿の高さ赤とんぼの高さ

秋刀魚の目おのが煙の中であり

半身をこの世に垂らし秋の蛇

恋人のやうに狛犬連れ歩く

自転車をしばらく寝かせ冬菜畑

昼間から日暮れ顔して蕪洗ふ

鮫鱈のぶら下がりゐる月の暈

どの雲も風に流され古暦

・ 第四回 「空賞」 受賞作品 ・

革命 栗原 京子



「空賞」をいただき、
ありがとうございます。
これから時間をかけて
ほんの少しでも柴田
佐知子先生の練達の域
に近づくことができ
ばと思います。

まだ、俳句について知らないことが多く、
今後学ばねばならないことの多さを考えると
前途多難です。心を引き締めて励みたいと思
いますよろしくお願い致します

勝者みな国旗掲げぬ凍てし地に

百年の木箱を出づる金屏風

冬眠や毒持つものの丸々と

火星まで旅立つごとし着膨れて

君追ひて白息を出し尽くす朝

冬ざれて信じぬ地球青きなど

定刻に雪付けて来し銀行員

波のない海は退屈別れ霜

蛇穴を出でふるさとは日本晴

どの猫も肥えて港の春眠し

揚雲雀今とは違ふ海女の像

花吹雪激しき方へ歩み寄る

石室に名は記されず春の雨

あるだけの漁具は干されて立夏かな

結葉や聖書の紙は薄く透け

次の世も血判残る青葉潮

苔の花水源に森広がりにて

山椒魚地球の丸さ未だ知らず

革命か戦か山笠の動き出す

夜更けまで鉦鳴る町に水中花

扇の風ゆつくり送る侍女の欲し

冷房に取り戻さるる理性かな

大風呂敷広げて蠅とともに去る

走り出す犬の筋肉涼新た

包みまで突き破りたる秋刀魚かな

町ぢゆうに朝顔絡ませてみたり

八朔や梁は樹液を出し続け

飲むほどに足音強く里神楽

拝まるることなき墓に小鳥来る

もう風も雨も怖れぬ刈田なり